

〈光雲窯〉 今村隆光さん

置き上げ

重ねること
生まれる
滑らかな立体感



硬い磁器の表面に
柔らかな布を重ねたような
滑らかな絵柄を表現する
「置き上げ」

三 川内焼を代表する技術に「置き上げ」がある。置き上げとは、陶石を砕いた磁土を水で溶かして作る白色の化粧土を筆で何十回も重ねていき、絵柄を立体的に表現するもの。三十年ほど途絶えていたこの技法を再興したのが光雲窯の今村隆光さんだ。

「置き上げの再興は、そんなに難しいことはなかったんです」と笑う今村さん。しかし、それは卓越した技術者に贈られる現代の名工にも選ばれている今村さん

だからこそ成し得たことであった。十五歳でこの道に入った今村さんは、有田焼の窯元で染付を二十年修行した後、自らの窯を開いた。長い修行の中で「やはり三川内焼の細くて美しい線を描きたい」という思いを抱いていたという。

見せていただいた箱の中には、置き上げに使用する下絵が何枚も入っていた。どれも上品で趣があり、なにより繊細なタッチが印象的だ。この下絵を素焼きにした生地に押し当てて絵柄を写し、

その上から水で溶かした化粧土を何度も塗り重ねてゆく。豆皿を一枚絵付けするのに丸一日かかることもあるという。気の遠くなる作業に、なんと根気のいることかと思ひ尋ねると、今村さんは「一筆一筆が楽しいんですよ。楽しくなければできません」と、にこやかに笑った。

幼い頃から絵を描くことが大好きだったという今村さん。自身の窯を開いてからは、好きな絵を一つひとつ丁寧に描き続けることができ、とても嬉しい

と話す。「この道六十年、辞めたいと思っただことは一度もありません」と断言する姿が清々しい。置き上げは鶴をモチーフにしたものが多い。これまで様々なモチーフを描いてきたが、最初に手掛けた鶴が代表作になったという。「実は今度は恐竜をモチーフに置き上げを試してみたいと考えています」と今村さんは目を輝かせる。絵を描くことが大好きな少年がそのまま大人になったかのような姿に、三川内焼の職人の神髄を見た。

と話す。「この道六十年、辞めたいと思っただことは一度もありません」と断言する姿が清々しい。置き上げは鶴をモチーフにしたものが多い。これまで様々なモチーフを描いてきたが、最初に手掛けた鶴が代表作になったという。「実は今度は恐竜をモチーフに置き上げを試してみたいと考えています」と今村さんは目を輝かせる。絵を描くことが大好きな少年がそのまま大人になったかのような姿に、三川内焼の職人の神髄を見た。

